

第3回「落語四百年」 (2013年9月24日)

講演者：山本 進（芸能史研究家 諸芸懇話会会員）

1931年兵庫県生まれ。東京大学在学中落語研究会の草分けとなり、以後NHK在勤中から現在に至るまで、落語を中心に幅広い活動を続けてきた。『圓生全集』『落語事典』などの編著や『えびたふ六代目圓生』『図説 落語の歴史』などの著書多数。

1. 私と落語

i) 落語との出会い

- ・ 子どもの頃、三代目金馬の『居酒屋』などをラジオで聴いて落語が好きになった。
- ・ 東大入学後、「日本文化研究会落語部」に参加。ただ一人の「落語部」専属。東大落語研究会の創始者とはいえないが、「草分け」といえる。若い頃は落語を演じるのにも熱心だったが、その後は専ら落語に関する研究や編集・著作に専心している。
- ・ 六代目圓生師との縁が深く、『圓生全集』や圓生師の著書の編集にも携わった。
- ・ 研究仲間（諸芸懇話会）との交流。

ii) なぜそれほど好きか？ ……面白いから。笑芸多々のなかでなぜ落語なのか？ 落語がいつごろ生まれ、どのようにして今日の形になったかを知れば落語がいつそう面白くなる。

2. 落語とは何か？

i) 笑芸の中での落語の特色

- ① 噺の内容が優れて面白いこと……滑稽なスジ、気の利いたサゲ、人情噺等変化
- ② 演出形式が整っていること……和服で正座、上下を切る、手ぬぐいと扇子
- ③ 芸として洗練が重ねられていること……台詞・仕草の工夫、何代にもわたる師弟伝承

ii) 落語の愉しみ

- ・ 笑いは人間だけの特権
- ・ 落語は“笑の芸”だけではない。人間性の本質をつこうとする芸。
- ・ 人間の業の肯定（故立川談志の言葉）……人間の弱さ愚かしさを客観的に見て滑稽ととらえ、諧謔の衣を着せて笑いのめすのが“落語の笑い”。時に毒を含み、涙を催す感動を誘うこともある。

3. 現代の落語ブーム

四百年にわたる歴史の中で、何度か「落語ブーム」と言われる時代があった。現代はまさに「平成落語ブーム」といえる時期にあり、その発端は平成17年ごろ。

平成17年…九代目林家正蔵襲名(3月)、TBSドラマ「タイガー&ドラゴン」放映(4月)、大銀座落語祭、圓朝祭

平成18年…NTV「笑点」2000回記念、大阪天満天神繁昌亭 開席(9月)

平成19年…NHK朝ドラ「ちりとてちん」放映

平成20年…桂米朝 文化勲章受章

4. 落語のはじまり

i) 落語のルーツ

人間が言葉を持った時点から、①面白い話 ②うまい話し手があったはずだが、現代に残る記録の中では、次のようなものが落語のルーツとされている。

- ・ 書かれた物語として、『竹取物語』（平安前期）…婿難題は語呂合わせが多く、最後は不死と富士の地口オチ。『源氏物語』（平安中期）…「末摘花」はコメディ。
- ・ 説話を編纂したものとして、『宇治大納言物語』、『宇治拾遺物語』（平安後期）前者の編纂者と目される宇治大納言源隆國を指して「落語家の先祖はお公家さん」という噺家もいる。

ii) 御伽衆（戦国大名の側近に仕えた「お咄の衆」）の出現

- ・ 先祖の武功噺、諸般の見聞、各種情報の収集。忍者、幫間、クラウン的な役割も？
- ・ 太閤秀吉の御伽衆は八百人、曾呂利新左衛門が著名
- ・ 戦国時代から江戸初期にかけての御伽衆の噺を纏めた『戲言養気集』、『きのふはけふの物語』などが元和・寛永年間（17世紀初め）に刊行された。

iii) 落語の祖、安楽庵策伝

- ・ 安楽庵策伝は浄土宗の談議僧で、京都誓願寺の住職。一説に秀吉の御伽衆とも。また茶人として広い交際があった。
- ・ 京都所司代板倉重宗の懇望により、談議僧の咄を集大成して『醒睡笑』を著した。元和9年（1623）成立、寛永5年（1628）献呈。8巻に千余話を収め、現代落語の源流となる咄を多く含む。一例として下に示す咄は今の『子ほめ』の原型といえる。ほかにも『平林』『牛ほめ』『かぼちゃ屋』『寝床』など多くの例が見られる。
- ・ 策伝は自らも咄を語ったので「落語の祖」といえるが、専門として不特定多数を相手に代金を集めて話した訳ではないので、「落語家の祖」とはいえない。

鈍副子(どんぶす)

『醒睡笑』巻之一

いはんかたなき鈍なる弟子あり。檀那(だんな)のあつまりて、茶うけなどある座敷に、年讃嘆(としさんだん)のあるは、常のならひなり。しかるにかの弟子、ややもすれば、いまだ三十の者をば、六十余りと見そこなうて笑はるるを、坊主聞きかねて、

「うつけに葉がないとはまことや。われも人も、年の寄りたきはなし。誰をも若いといはんこそ本意(ほんい)ならめ。あなかしこ、粗忽(そこつ)に人を年寄といふな」と教へられ、あけの日、かの弟子使僧(しそう)に行き、女房の子を抱きあるを見付け、

「この御子息はいくつにてありや」

「これはことし生れ、片子(かたこ)にておいらある」

と答へけり。弟子、

「さてかた子には若く御座あるよ」

と。

5. 落語家の祖

i) 落語家の祖の出現（1670～80年代、延宝～天和の頃、京都・江戸・大坂ほぼ同時に）

- ・ 露の五郎兵衛＝上方落語の祖…辻噺、『軽口露がはなし』ほか
- ・ 鹿野武佐衛門＝江戸落語の祖…座敷仕方噺・辻噺、『鹿の巻筆』ほか
- ・ 米沢彦八＝大阪落語の祖…辻噺、『軽口御前男』ほか

これらの活躍に刺激されて多くの話し手が現れ、第一次落語ブームが出現した。

ii) 武佐衛門の筆禍事件と落語ブームの衰退

元禄6年（1693）に「この夏ソロリコロリという疫病が流行るが、梅干と南天の実を煎じて飲めば防げると、物言う馬のお告げがあった」という噂が流れ、梅干と南天の値が高騰した。詮議の末、金儲けのために噂を流した者が捕えられたが、『鹿の巻筆』にある小咄から着想を得たと白状したため、武佐衛門も連座して伊豆大島に流罪となり、版木は焼却された。これを機に落語ブームが鎮まり、以後百年の間沈滞することになった。

6. 落語中興の祖、立川焉馬

i) もと大工の棟梁だった烏亭焉馬は、本所堅川の近くに住んでいたため立川焉馬とも称し、戯作者・狂歌師として活躍した。天明6年（1786）に向島の料亭で第一回「咄の会」を開催し、太田蜀山人はじめ多数集まった客からも小咄を集めて、自作とともに披露した。

ii) この会は非常に好評で以後定例化され、第二次落語ブームが広がったことから、立川焉馬を「落語中興の祖」と呼ぶ。故立川談志が広めた立川という名跡はこの立川焉馬に遡る。

7. 山生亭花楽（三笑亭可楽）と寄席興行のはじまり

i) 櫛職人であった京屋又五郎は落し噺に長じ、山生亭花楽（後に三笑亭可楽）と名乗り「咄の会」にも加わっていたが、寛政10年（1798）下谷で寄席興行を開始した。これが寄席の始まりと言われ、平成10年（1998）には寄席発祥二百年を記念する行事が行われた。

ii) 焉馬や可楽を中心とする活動の中から、三遊亭圓生、林家正蔵など現代にまで連なる名跡が生まれた。可楽が売物にした「三題噺」という形式も幕末期に至って盛んになった。

iii) 水野忠邦による「天保の改革」により、天保13年（1842）には寄席興行も大打撃を受けたが、翌年水野が失脚して暫くすると復活し、幕末には寄席・噺家の数や演目も増え、寄席興行は隆盛を極めた。安政2年（1855）には江戸市中に172軒の寄席があったという。

8. 三遊亭圓朝と明治以後の発展

i) 幕末から明治にかけて、現代落語の祖といわれる巨星三遊亭圓朝が活躍し、数々の名作を生み出したほか、速記本という新しい形を生み、言文一致体の普及促進に貢献した。

ii) その後明治期の三遊・柳（江戸）／桂・三友（上方）の競合、大正期の寄席戦国時代、戦時下の寄席芸能、昭和戦後の黄金期、上方落語の奇跡の復活、などといった経緯を経て3. に述べた平成の落語ブームに至った。寄席開設以来、「波乱万丈の二百年」であったといえる。明治以降の詳細については、また別の機会に詳しく述べたい。

付：落語史略年表（次ページ）

落語史略年表

▼寛永 五 (二六二八)	▼*安楽庵策伝『醒睡笑』を京都所司代・板倉重宗に献呈。
▼延宝 〓天和 (二六七三 〓八三)	▼*この頃から、露の五郎兵衛(京都)、 鹿野武左衛門(江戸) 米沢彦八(大坂)ら、仕噺を始める。
▼元禄 七 (二六九五)	▼*悪疫流行のデマに関わったかどで、鹿野武左衛門、流罪。
▼天明 六 (二七八六)	▼*鳥亭焉馬、向島料亭で初度の咄の会を催す。
▼寛政一〇 (二七九八) 頃	▼*岡本万作、①可楽ら、寄席興行を始める(①文治、①圓生らも)。
▼文化 四 (二八〇七)	▼*喜久亭寿暁、噺の題名〈延約六〇〇題〉を記した『滑稽集』を著す。
▼文政一 一 (二八二九) 頃	▼*①正蔵、両国に寄席縫宮。この頃、江戸市中の寄席二二五軒。
▼天保 七 (二八三六)	▼*①圓生、『東都噺者師弟系図』〈含・二七〇人(うち物故者五〇人)〉を著す。
▼天保一三 (二八四二)	▼*天保改革により古席一五席(及び寺社地九軒)以外の寄席、取潰しとなる。
▼弘化 一 (二八四四)	▼*四業(神道講釈・心学軍書講談・昔咄)に限り、寄席興行勝手次第となる。
▼安政 二 (二八五五)	▼*①圓朝、真打。この頃、江戸市中の軍談席三二〇、落語席二七二。
▼明治 五 (二八七二)	▼*東京府知事、寄席の狂言類似の興行を禁止。
▼明治 八 (二八七五)	▼*寄席芸人の賦金制度に伴い、「陸連」発足。
▼明治一四 (二八八二)	▼*寄席四天王の珍芸など大流行。
▼明治一七 (二八八四)	▼*圓朝『怪談牡丹燈籠』初の速記本として刊行。
▼明治二六 (二八九三)	▼*上方で桂・三友の両派並立、黄金期を招来。
▼明治三三 (二九〇〇)	▼*桂塚、柳塚建立。①圓朝、①燕枝、③柳枝、④柳橋、没。
▼明治三六 (二九〇三)	▼*英国グラモホン社により、日本での平円盤レコード、初出張録音。
▼明治三八 (二九〇五)	▼*第一次落語研究会、発足。
▼大正 二 (二九二三)	▼*大阪・吉本興行部、創立。
▼大正 六 (二九二七)	▼*東京寄席演芸株式会社、東京落語睦会、発足。東西交流活発化。
▼昭和 四 (二九二九)	▼*『落語全集』『名作落語全集』など、落語出版盛行。
▼昭和 六 (二九三二)	▼*ラジオで初の寄席中継。寄席の転・廃業進む。
▼昭和 九 (二九三四)	▼*①春團治、没。上方落語、衰退の傾向顕著。
▼昭和一六 (二九四二)	▼*禁演落語五三種を「はなし塚」に葬る。
▼昭和二六 (二九五二)	▼*民間放送(ラジオ)、発足。
▼昭和二八 (二九五三)	▼*テレビ放送、開始。落語家の放送局専属契約始まる。
▼昭和三二 (二九五七)	▼*上方落語協会、発足。
▼昭和四六 (二九七二)	▼*立川談志、参議院議員に当選。
▼昭和五四 (二九七九)	▼*国立劇場演芸場、開場。⑥圓生、没。
▼平成 七 (二九九五)	▼*⑤小さん、人間国宝に認定。翌年、③米朝これに続く。
▼平成一七 (二〇〇五)	▼*この頃から、平成落語ブーム。翌年、天満天神繁昌亭、開席。
▼平成二二 (二〇〇五)	▼*③米朝、文化勲章受章。